

# 松江藩医学学校教授山本家の事跡 追補

田 籠 博

## 0 はじめに

本紀要第六号に寄せた拙稿「松江藩医学学校教授山本家の事跡」(以下、前稿)は、地方における近世本草学の展開をうかがう一例として、出雲国松江藩の医学教授として京都から招かれた山本逸記(良克)を始祖とする三代の事跡を辿った試みであった。佐野正巳氏の『松江藩学芸史の研究』(明治書院、一九八一)に先蹤はあるものの、前稿によって初めて明らかになった事実も多い。およそ七〇年もの間、松江藩の医学学校「存濟館」の教授をつとめた山本家の人々の事跡や、医学・本草学の知識が地方へ拡がりを得ていた様相、師弟が一隊をなして採薬の試みを行っていた事実などがそうである。

本稿では、その後の調査・検討による補足訂正を行い、二つの著作の翻刻を行う。翻刻は、前稿で一部紹介した初代逸記(良克)の『黄帝内経抄略』序文と、二代安良(良阜)の漢詩集『鸚鵡先生百絶句』全文である。

## 1 初代 山本逸記 追補

初代逸記について、新たに補うべき事実はない。ただ、前稿でのべた松江藩仕官以前の、逸記の師事した人物に関して訂すべきところがある。

前稿で紹介したように、逸記の師事した人物名は、その著作『穴法記聞』A本(京都大学中央図書館富士川文庫蔵)序文に「先師東菴先生」と見え、『黄帝内経抄略』(杏雨書屋・松江日赤医学図書室蔵)序文に「先師函南膝子」と見え

ている。前稿では、後者の「図南」を、平安四竹の一人と称された画人で、医を業とした浅井図南であろうとしたが、問題がある。浅井図南が「滕子」を名乗ったことを確認できず、他方で「図南」を号して時期的にも適切に重なる人物をまだ見出すことができていないからである。

これとは逆に、前稿で触れなかった「東菴先生」については、吉益東洞（一七〇二〜一七七三）の可能性があることを指摘しておきたい。東洞は、安芸広島の出で、「傷寒論」に基づく古医法を研究し、元文三年（一七三八）に京都へ移住、その地で講筵を開いて数多くの門弟に医学を講じた人物である。東洞の前の号が「東庵」である。もともと、東洞と改めた後になっても、逸記が師の旧号を使用していることになり、その点に若干の不安がないわけではないから、一案として述べておくにとどめる。

本稿では、杏雨書屋蔵『黄帝内经抄略』序文を全文翻刻し、同書の訓点に従った訓み下し文を作成した。松江日赤医学図書室本については、既に佐野氏の著書（319〜320頁）に全文が翻刻されているが、多少の誤りが含まれる。また、同本には訓点がないのに対して、杏雨書屋本では詳細に記されている。本文に關しても、書き込み・抹消訂正の多い松江日赤本に比して、杏雨書屋本はわずかしかないから、清書本に相当するものと考えられる。特に著しい相違は、本文の上欄外に、時に詳密な注記が備わることである。第四章の注記に「良臣案」とあるから、逸記の孫にあたる三代泰淵（良臣）による注記と思われる。

### 翻刻『黄帝内经抄略』序文

【原文】\*下欄に佐野氏の翻刻との校異を示す。識語の後文は松江日赤本にはない。

#### 黄帝内经抄略序

先師図南滕子嘗語生徒曰内经至矣道德經濟拳而不遺若夫老莊列子道德之羽翼越人仲景經濟之輔弼彼此相須体用兼備矣又曰世之以内经授人者認診治之跡而忘道德之原其至道真言視若

土塊棄若芥塵道之不明職此之由<sup>②</sup>又曰我有道德<sup>③</sup>學有經濟學道德者經濟之本不可須臾離也今之  
 医者偶有學經濟者未嘗有學道德者宜乎世之無良医也良克雖後乎少侍函丈亦興<sup>④</sup>聞其言於茲乎  
 鑽研糜精於靈素二經將此定作講習之資者五十年一日矣未嘗一日而懈怠以自為且以為人而及  
 我門者要不下數百人往々咸神化涵養于經學之中得以遜其業焉濟其事焉名其家焉植其名焉滕  
 子之言於是乎驗矣良克之勤於是乎達矣要之曩聖慈憫之寵錫<sup>⑤</sup>矣豈可弗欣戴感<sup>⑥</sup>乎耶然而靈素二  
 經之洪傳泛濫莫有端倪也使<sup>⑦</sup>讀者或茫懷望洋之惑良克迺窃有意乎撮其精粹汰其粗糲定作一家  
 考本以資晚季医家下劣根器之受用也良克時以命殂土寓居平安之市占賃居於埃壙之中上無恒  
 祿撫循之主君下有饑寒号泣之眷累迺講帷之所垂處雖從游之士雲集風翕然亦衆之鳥合聚散無  
 定而束脩之所入時不贍於糊口生活則衣食于奔走而莫有寧居底止所以雖無諉乎撰述之事而顧  
 有憾於夙志之艱乎躊躇矣暨至一委我質而官于雲藩也仕進之日淺則祿薄而班資亦卑固其分焉  
 然而稟人繼粟居多暇日得以優游盤桓而我心則降於是乎再訂旧業有事乎帖畢迺不自揣我量之  
 謏劣初而述勤服聖語勤服聖語之為述也勤求二經之中事之閱經濟者以成篇牘從乃參詳從前諸  
 家之訓詁新作註釈<sup>⑧</sup>附以愚案以擬行諸藩部以繩矩於医家行事之實既而窃謂經濟之學業既得矣  
 道德之原其如之何迺復就二經之中搜採抄撮言之繫道德者釐成八十一章借題曰内經抄略盖二  
 經每各九九成篇乃黃鐘之數云而李伯陽氏之五千言亦九九成章夫伯陽氏之於帝軒伯岐厥源厥  
 委兄弟匪他所謂黃老之稱足以徵也良克又窃謂新述抄略八十一章雖出于予之筆載然其美鬱為  
 曩聖之偉訓明諷足以揭之万世而日月争光矣斯編而一出也李家之書之胥得胥須載馳驅乎宇  
 宙間者意者不啻車輪之兩鳥翼之双也亦是亦足以沢乎衛生之家而兼被之慕仰去理之徒矣？不亦  
 快活之至乎抑勤服聖語之為述也卷數不止二三加旃訓詁註釈之施未易倉卒而弁而行予也年老  
 心煥弗能徒費居諸則先督課男良卓校成抄略之書良卓迺勉効力弗肯荒怠數旬之後稿初脫却業  
 告完全於戲沙礫積微或增泰山之崇泛舸一葉善達扶桑之津斯書之成予与良卓也不無贊<sup>⑨</sup>聖宏道之

② 曲

③ ナシ

④ ナシ

⑤ 与

⑥ ナシ

⑦ 虫損

⑧ 博

⑨ 俾

⑩ 撫循ナシ

⑪ 徒

⑫ 付

⑬ 徵也虫損

⑭ 鳥

⑮ ナシ

寸功則自保其不為大方君子之所擯棄也。迺敢紀其顛末者如是。

文政龍飛初元歲在戊寅之九月九日

出雲藩特聘醫學教授美濃館良克札夫敬識于松江官寓之從容葆齋中昔年七十又六<sup>①⑥</sup>

①⑥美濃館 ①⑦五

門人某問曰所謂道德經濟其於我醫也果何義也。道德豈指說理乎。經濟豈指施術乎。觀論中纂次蓋有孺于施術者而不純於說理焉。亦何義也。答曰善如爾之問也。予今之所業率采二經中押韻成語者。夫押韻成語者半涉所謂称述。假令其涉于施術要說理相半矣。且夫道德經濟原假儒中之語而言之。其實我醫理与儒事復別何也。醫司性命而儒講道教。所以夫於彼者其用在。外夫於我者其体在内。母異乎道德經濟之不全符儒語也。伝曰夫言豈一端而已。夫各有所当也。読斯編者其悉知之。良克再識。

【訓読文】\*杏雨書屋本の訓点に従う。平仮名は翻刻者の補読。

先師凶南藤子、嘗て生徒ニ語テ曰ク、内経ハ至レリ、道德經濟拳ケテ遺サズ、若シ夫ノ老莊列士ハ道德の羽翼、越人仲景ハ經濟の輔弼、彼此相須テ体用兼テ備ハル。又曰ク、世の内経ヲ以テ人ニ授クル者、診治の跡ヲ認ル、而テ道德の原ヲ忘ル、其至道真言視テ土塊ノ若クシ、棄テ芥塵ノ若クス、道の明ナラザル職トシテ、此ニ由レリ。又曰ク、我ニ道德ノ学有リ、經濟ノ学有リ、道德ハ經濟の本、須臾モ離ス可カラズ、今の医者、偶<sup>たま</sup>經濟ヲ学フ者有リ、未タ嘗テ道德ヲ学フ者有ラスト。宜ナルカナ、世の良医無キコト。良克少シテ函丈侍スルニ後レタリト雖トモ、亦其言ヲ興リ聞ケリ。茲ニ於テヤ、靈素二經ニ鑽研靡精シ、此レヲ將テ定メテ講習の資ト作ス者、五十年一日ナリ。未タ嘗テ一日モ而カ懈タラス。蓋シ以テ自ラ為ニシ、且ツ以テ人ノ為ニス。而シテ我カ門ニ及フ者、要數百人ヲ下ラズ。往々咸<sup>か</sup>經学の中ニ神化涵養シテ、以テ其の業ニ遜ナリ。其の事ヲ濟シ、其の家ニ名アリ、其の名ヲ植ツルコトヲ得タリ。滕子の言、是ニ於テヤ驗ス。良克の勤メ、是ニ於テヤ達ス。之ヲ要スルニ、曩成慈憫の寵錫ナリ。豈ニ欣戴感孚セサル可シ耶。然リ而シテ靈素二經の洪博泛濫、端倪有ル莫キナリ。読者ヲシテ或ハ茫トシテ望洋の惑ヲ懷カ使ム。良克廼チ窃ニ其の精粹を撮リ、

其の粗糲ヲ汰シ、一家ノ考本ト作シ、以テ晩季医家下劣根器の受用ニ資ルニ意有り。良克時ニ以テ命処士ヲ以テ、平安の市ニ寓居シ、賃居ヲ埃埽の中ニ占ム。上恒禄撫循の主君無く、下饑寒号泣の眷累有り。廻チ講帷の垂ル、所、処從游の士雲集風翕スト雖トモ、然モ亦衆の烏合聚散定リ無クシテ、束脩の入ル所、時ニ糊口生活ニ瞻ラザレハ、則チ衣食に奔走シテ、寧居底止有ル莫シ。所以テ撰述の事ヲ諉ル、こと無シト雖トモ、而カモ夙志の躊躇ニ艱ムニ憾ヒ有り。一ヒ我カ質ヲ委シテ雲藩ニ官スルニ至ルニ暨ンテヤ、仕進の日浅ケレハ則チ禄薄クシテ班資モ亦卑キハ固ヨリ其の分ナリ。然リ而シテ稟人粟ヲ継キ、居暇日多く、以テ優游盤桓を得タリ。而シテ我が心則チ降ル。是ニ於テヤ再び旧業訂シ、咄畢ヲ事スルコト有り。廻チ自ラ我カ量の謏劣ヲ揣ラズ、初メテ勤服聖語ヲ述フ。勤服聖語の述為ルヤ、勤メテ二經の中事の經濟ニ関ル者ヲ求テ、以テ篇牘ヲ成ス。從テ乃チ從前諸家の訓詁ヲ參詳シ、新ニ註釈ヲ作り、附スルニ愚案ヲ以テシ、以テ諸ヲ藩部ニ行ヒ、以テ医家行事の实ヲ繩矩スルニ擬ス。既ニシテ竊カニ謂フ、經濟の學業既ニ得タリ、道德の原其レ之ヲ如何ンセン。廻チ復タ二經の中ニ就テ、言の道德ニ繫ル者ヲ搜採抄撮シ、釐メテ八十一章ト成シ、僭ニ題シテ内經抄略ト曰フ。蓋シ二經おの毎各九九篇ヲ成ス。乃チ黃鐘の數ト云フ。而シテ李伯陽氏の五千言モ亦九九章ヲ成ス。夫ノ伯陽氏の帝軒伯岐厥源厥委兄弟他ニ匪ス。所謂ル黃老の稱、以テ徵スルニ足レリ。良克又竊カニ謂フ、新ニ抄略八十一章ヲ述フル、予の筆載ニ出スト雖トモ、然其の实ハ鬱タル曩聖の偉訓明諤為リ。以テ之ヲ万世掲ケ、而テ日月光ヲ争フに足レリ。斯の編而モ一ヒ出ツルヤ、須チ李家の書の宇宙ノ間ニ胥得胥載チ馳セ載チ驅ル者、意者オモ營車輪の両鳥翼の双ノミナラズ。是亦以テ衛生の家ニ沢スルニ足リテ、兼テ之ヲ慕仰去理の徒ニ被ラシム。諱亦快活の至ナラズヤ。抑勤服聖語の述為ルヤ、卷數二三ニ止ラズ。加旃シクミヤス訓詁註釈の施シ、未タ倉卒ニシテ弁シテ行ヒ易カラズ。予ヤ年老へ、心熾徒ニ居諸ヲ費スコト能ハ弗レハ、則チ先ニ男良阜ニ督課シ、抄略の書ヲ校成シ、良阜廻チ毘勉効力肯テ荒怠せず、數句の後稿初テ脱シ、業ヲ却テ完全ヲ告ク。於戲沙礫積微或ハ泰山の崇ヲ増シ、泛舸一葉善ク扶桑の津ニ達ス。斯ノ書の成ル、予ト良阜トヤ贊聖宏道の寸功無シハアラス。則チ自ラ保ち、其レ大方の君子の擯棄セラル、コトヲ為サザルナリ。廻チ敢テ其の顛末ヲ紀スル者、是ノ如シ。

文政龍飛初元歲在戊寅之九月九日

出雲藩特聘医学教授美濃館良克礼夫、敬テ松江官寓の従容葆齋中ニ識ス。昔年七十又六。

門人某問テ曰ク、所謂ル道德経済、其レ我カ医ニ於テヤ果シテ何シノ義そや。道德豈ニ説理ヲ指スカ、経済ハ豈ニ施術ヲ指スカ。論中纂次ヲ観るニ、蓋シ施術ヲ採スル者有リテ説理ニ純ナラズ。亦何シノ義ソヤ。答テ曰ク、善シ爾カ問ヒノ如キヤ。予今業トスル所、率ネニ經中押韵成語ノ者ヲ采ル。夫ノ押韵成語の者、半ハ所謂ル称述ニ涉ル。仮令ヘハ施術ニ涉ルモ、要説理相ヒ半ハス。且ツ夫ノ道德経済、原儒中の語ヲ仮リテ之ヲ言フ。其実ハ我カ医理ト儒事ト夙別、何ソヤ。医、性命ヲ司リテ、儒、道教ヲ講ス。所以ニ、夫ノ彼ニ於テハ其用外ニ在リ、夫ノ我ニ於テハ其体内ニ在リ。道德経済の全ク儒語ニ符セザルヲ異ムコト母レ。伝テ曰ク、夫ノ言豈ニ一端而已。夫ノ各当ル所有ル也ト。斯ノ編ヲ讀ム者、其レ悉ク之ヲ知レ。良克再ヒ識ス。

## 2 二代 山本安良 追補

二代安良については、前稿で指摘したように、医学校教授を三五年間もつとめたにしては『烈士録』に記事が少ない。本務は別として、安良の主たる関心は詩作にあつたようである。そこで本稿では、安良の子良臣の編に係る漢詩集『鶚寮先生百絶句』を翻刻して、安良の事跡をうかがう資料として紹介する。

本書には二種の写本が存する。ともに杏雨書屋の蔵本である。

一本（A本）は、恐らく原本というべき書で、序文の記された文政十一年（一八二八）頃に成つたのであろう。題箋に「鶚寮先生百絶句 完」とする全二〇丁（序一丁、本文一六丁、跋三丁）の写本である。題字、序文、本文はすべて同筆で、良臣筆と思われる。上欄外の詩の評と跋文とは明らかに別筆で、評は秦文伯（B本一丁表「秦文伯評曰 下並同」）、跋文は帆厓秋山清の手による。詩題の下または上欄外に典故注記等があり、本文と同筆と思われる。

もう一本（B本）は、題箋に「鶚寮先生百絶句 全」とする全一八丁（序一丁、本文一四丁、跋三丁）の写本で、全文一筆、すべて良臣の筆写に係る。「雲藩茶梅園」用箋を用いている点は、良臣筆写の他の本草学書と共通する。書写

されたのは、尾題下に「己巳二月再校改写良臣識」とあるところから、明治二年（一八六九）の清書本である。良臣の晩年（六〇歳）に属し、原本から約四〇年を経ている。ちなみに、明治三年には医学学校「存濟館」は廃止され、西洋医学学校が設立されている。

所収の漢詩については、本稿では特に論じない。松江の一年を詠じたNo 50以下の十二首、あるいは出雲地方各地の名勝を詠じた詩などを、興味ある試みと思う程度にとどまる。

作品に年記の附されているものがある。No 26の「丙子」は文化一三年（一八一六）、No 34の「丁丑」は文化一四年（一八一七）、No 78の「乙酉」は文政八年（一八一五）である。本書が文政一一年の編纂であることと矛盾しない。

以下の翻刻はA本による。安良の詩風を論じた長文の跋文および評は割愛した。詩番号は翻刻者が附した。

翻刻に際してはB本を参照したが、本文の相違は原則として認められなかった。なお、No 78、87の十首に限っては、詩題が左に記されている点に注意を要する。欄外の出典注記等は、詩題の下に移した。

### 翻刻『鷗寮先生百絶句』

#### 鷗寮先生百絶句序

家君鷗寮先生夙以才敏名轟京師第以其志在文章大業富於著述故也至若詩藻視為未技毫不介意然而十歲左右既已善詩雖以独学無師旁僮及之人亦称其卓絶焉及後從大父官雲藩也以任亦在医学教諭故日坐饗舍授徒勿懈而詩藻之技稍就荒棄然亦每值登山臨水之適朋好宴私之晤節序放學之閒時一為之亦唯托興遣懷故不論格調不屑擬議有時乎肖乎四唐焉有時乎類乎宋元焉而豪宕而險奇而纖巧而平坦非復一軌此其志別有在之致然而

先生之所以為先生也要亦在茲其詩不故曰乎無挾元明唐宋格興情々感觸成詞可以見已今者飯冢西山二生謁予編先生百絕句且作其序因直書是事使其弁其首戊子冬日館良臣識

鷗寮先生百絕句

青浦館良臣徵聖輯錄

琴川飯孝良德基

全校

荻原西山爽暉遠

夏日山行 此及下篇並係先生十二歲在京時作

1 一声何処子規啼 滿逕松蘿人迹迷 流水潺潺山寂々 樵歌隔在數峯西

有人藏小野寺秀和江戶寄內手筆書出以是跡

2 赤穂臣僚世旧伝 忠肝義胆氣昂然 丈夫特下溫柔筆 惓々情懷上彩箋

燕子花

3 花号燕子因形侶 色欲奪朱殊不同 滿架紫藤顔老日 凝粧擅美向薰風

清光院集分題屏風画得先

4 遙山近水帶平田 竹屋茅檐三四椽 灣口風過暑如洗 一行人影落晴漣

田子朗宅偶題步王江寧夜飲韻 見余事詩卷一

5 銀燭青樽對罄歎 更闌興激不知寒 階庭好取梅花月 携手風前倚檻看

題步障山水圖為山田文太郎

6 危峰幽壑午氛収 瀑布一条居上流 流水至清魚在否 漁叟先我立磯頭

從軍行

- 7 幕府高臨大漢雄 不辭書記遠從戎 微名祇願燕然石 得勒振威寶將功  
三島柳樂二生夜話
- 8 風力猶恬雪未花 書堂夜話適何如 排窓且引鱸鄉月 下鏡閑烹兔道茶  
賦得雷声忽送千峯兩分韻
- 9 雷車驅雨落千山 抹尽青螺十二鬟 相將不惜分余勢 大点撤来城市間  
秋江閑汎得九佳
- 10 輕舟泛々下江涯 芦泐楓湾到处佳 不待片雲頭上黑 澄波凉吹健詩懷  
早秋夜坐得蒸
- 11 夜堂攤衷少炎蒸 幽独相親只是灯 残蚊臂裂徒声聒 零露階霑漸氣澄  
賦得江舩火独明分韻
- 12 鼓柁鳴榔不復聞 暗風吹雨乱江雲 唯有蓬灯一点赤 吳舩楚船望難分  
文達湖樓集同賦即目分韻
- 13 江嶂乍晴還乍雨 青螺白練幾披収 都来数幅天然画 酷慰登樓賦客眸  
十四夜安文伯父子邀予泛舟江湾
- 14 瓜皮載我酒如河 山月江風恰々多 最是金波清艷裡 乃郎詩就乃翁歌  
津田所見 原五
- 15 紫芋碧茄随処簇 就中圃種繁蘿蔔 農丁近日有新忙 洗得初萌走市鬻  
和上杉生南郡途上作 原十
- 16 沙戸成隣水駅寒 敗荷残柳自秋闌 酒家有苦邀人意 街尾風帘一二竿
- 17 江程纔尽便山程 晴旭薰人露草明 途上行聞田父話 連朝霧可卜堅晴  
讀六如詩鈔有感 在雜稿之三

18 偽詩噪世百余年 客氣薰蒸誤俊賢 今日寰區復真調 誰知此叟着先鞭 叟原稿作衲

記夢 見漫稿上

19 泉甘土沃閑居寄 路軫峰環漫步試 最是幽投名墅中 高樓置酒從容醉

正月四日雪 見雜稿之三

20 江天一夜雪花飛 誰信陽春昨已歸 遠樹有風聲漸近 無端迸玉灑齋扉

西河夜歸

21 鬪酒逃筵衝暗燭 遠燈行指洩林輝 叢祠賽會知未散 笛鼓聲追涼吹飛

南村閑遊

22 隴畝林塘棠澗曲 村園門巷趨江澳 閑遊相引且相謀 可覓早楓探晚菊

雪中所見

23 風休整々作斜々 点柳粧梅姿態加 最是墩篁均受压 依稀頽架白藤花

疊前韻

24 仄仄庭柯々漸斜 柯々綴玉且交加 此間滕六何工巧 頃刻花成連日花

孫康映雪

25 苦學三冬甘誦雪 清修千載喜聞風 炫名多少人今古 枉費焚膏繼晷紅

元日病中口号 丙子

26 春城曙色定如何 粉堞朱門旭影和 最是高松千万本 尺含祥靄鶴鳴多

答人問文学及詩 二首收雜稿之三

27 先秦西漢大鍾鏞 韓柳歐蘇大範模 頓悟鎔東做西訣 文能經世是吾徒

28 無挾元明唐宋格 興情々感触成辭 只於声律極精鍊 此是鷄寮医史詩

送蒼笠菴南遊 同上

- 29 霜露初嚴楓菊殘 試吟猶自發征鞍 莫是遠朋相暖熱 催君不復怕天寒
- 30 預等山陰雪正飛 看君廻棹及湖磯 飯饒無意追尋戴 猶似門前興尺歸
- 勢多橋晴望 抄目雜稿三
- 31 溝渠十字人家个 嶽雪芙蓉玉朶開 晴檻非無心久倚 送寒多怕晚颺來
- 草堂初開文会分韻同賦 在雜稿三卷
- 32 卜夜文章細与論 交歡且倒酒盈尊 都下一時髦俊富 喜看強半聚吾門
- 寄懷崖渠陽于平安 原十二 収于雜稿之三
- 33 凍雪封松不復濤 陰風旧竹聽鳴蕭 故人何狀過此夜 知否殘燈儂独挑
- 依韵和渠陽移居後見示作 丁丑
- 34 曾是三遷追孟跡 今聞勝地下居新 擲財料想將百万 更有人々爭買隣
- 移來窓竹心成蔭 架得書樓幾試攀 直再名街都輦最 容君恰好在其間
- 雪中所見
- 35 大雪灑々小聲淅 雪落竹身將起時 雲隙纔過紅旭影 果斜果直未忘知
- 文伯至結句同用
- 36 朋來苔砌且移床 擬得山中幽处莊 雨霽日長新暑動 辛爨花下对傾觴
- 茶具圖為河野衡平
- 37 世上漫伝茶有神 成功解否藉斯倫 玉川去後千教歲 習々清風長在人
- 山房初夏書事課題分韵
- 38 也無桃李下成蹊 繞舍林々新綠低 懶睡醒來日亭午 啼鵲飛過澗橋西
- 40 稻針抽了綠十畝 花雨漲來紅一溪 春事闌珊夏事嫩 憑軒喜許尚堪題
- 文伯至得韵魚 収于雜稿之三 十音句

41 家々宥有臙鱸魚 寒雨連江欲雪初 何似閑窓梅氣裏 与君交膝檢生書  
夜雪

42 砌篔休戰想凍合 衾鉄逼人知尺盈 静点低遭風勢激 怒篩争灑紙窓声  
夏月依橘千蔭歌意

43 火傘西沈風箔戰 一天清徹碧琉璃 春宵秋夜偕多翳 坐月誰知宜夏時  
三月小尺于野探花々已摧殘矣帰路過甫里生分字得山

44 自笑探春空手還 吟樓猶喜晚纒攀 五金七玉從攫取 安識詩家非宝山  
贈小倉九谷

45 用捨行藏各有時 陷名牟利豈繁枝 巧手祗応安瑟鼓 齊門果否愛竿吹  
凡紫庸紅浪得時 紛花競艷一枝々 清芬別有猗蘭在 不仮春風為煦吹

47 余事詩人此一時 巢林亦自足鶴枝 毀譽何物將何用 応附過風馬耳吹 余事詩人先生別号  
原？註 ？詩多情懷酒伴餘事作詩人先生取以自比馬耳吹用俗諺語

48 秋晴引興岸烏紗 路自湖村沙步過 小店投来又買醉 一湾楓葉夕陽多  
秋晴漫步  
郊行書事時維十月

49 千林楓錦亦無痕 松翠其如媚態貧 玄帝由来嫌点飾 工於淡処別成春  
松江十二月咏 引録原稿之三

50 終日馳驅綺陌間 晚衝煙燄且盤旋 偉觀調馬不多見 好共盛岡樺火伝 正月  
稲祠開会暖烟籠 士女喧闐報賽同 別有一群村婦陣 濃藍長袖趁春風 二月

52 春月常年例雨多 探桜如此漏天何 纔迎新霽人相曠 可向津田向佐陀 三月  
試出城門步爛晴 殘芳滿野紫雲英 茶籃酒榼貴女伴 知了金山香愿行 四月

- 54 梅熟江天雨脚斜 万艘収嶼簇檣牙 土人此際伝誇語 真箇関西小浪華 五月
- 55 不学米家書画船 營成仮屋百千間 奇童閨秀誰々筆 併肆瓶花盆子山 六月
- 56 暑威猶猛秋至遲 遊舫争追川下期 拇戰声微斜漢轉 三絃語起浄瑠璃 七月
- 57 蝦虎魚肥解上鉤 牢晴連画引江游 閑人老練双竿手 舳艫盛来万々頭 八月
- 58 処々叢祠祭事繁 稻豊梁稔景猶暄 都人応請没虚日 昨赴南村今北村 九月
- 59 大社会神奇典哉 獐麕往々簸江開 街頭行聴西商語 昨日龍王使者来 十月
- 60 豪家子弟飮佳羞 忽憶鮮鱸且命浮 適意藉嫌張翰跡 伋応乘輿像王猷 十一月
- 61 白雪環江又庄山 碧滌浚接玉厚顏 景勝殊絶難開喙 鮮了前人著句慳 十二月
- 62 甫里集同九谷分得山茶花茶字  
幽情知耻醉顏酡 甘受芳名一味茶 梅喚花魁終冷淡 早伝風信赫無知
- 63 三日会遏密之令故不出此日雨  
閉戸重三雨色濛 坐看梨白与桃紅 焉知暢叙幽情迹 不在書軒独酌中
- 64 四月五日同文伯諸子訪小倉九谷探得中字  
読書櫛敞引薰風 主客团欒樂意融 晚転吟牀就幽砌 一鉤織月緑陰中
- 65 三月尺九谷以二詩見寄懷一次其韵一依其韵和答  
羞恨官霸爲俗物 難追吟侶屢經過 領詩也憶前秋事 投我瓊章韵押磨
- 66 君自推敲賈浪仙 爲欣騷雅托良縁 伏枕何妨詩思巧 清新還見惜春篇
- 67 七月十八日即事前夜雨  
雨後殘炎酷一倍 爲求清蔭涉園頻 鳴蟬亦厭返景射 飛自松身移柳身
- 68 九月十九日赴引野孝孫酒招得真字  
乘馬乘船賀李真 倒罌倒榼劉伯倫 倘対利顛名醉客 滿筵渾是独醒人

九月二十二日玉造所見

69 玉山秋老霜葉多 澗水拖藍嶺疊螺 南去北來緇又素 都從着色畫中過

畫虎心某生請

70 畫虎類貓猶可恕 裝貓做虎不勝稠 人卅閱來吾眼熟 幅間之物素知不

又為山田国器

71 画手摹真解入真 癡姿眩目又眩神 展來不独猛於感 無限人間皮再人

十二月十八日值立春節春意早皈積雪皆解至廿五日又雪同賦得真

72 素艷休為雪眼看 丘林連岫望先勻 東君莫癢經年技 便放桜花爛熳春

賦得独釣寒江雪

73 魚隊深潛不受鉤 漫空雪片大如毬 藉茅凝坐長江曲 万頃寒水一釣叟

九日有感

74 老矣登高不復為 披編独誦蛻翁詩 蛻翁若在心驚殞 海內文章落我医

予既留寓山子善宅將俱探琴峽之勝也西山淳

夫前已約同遊而疾不果來帳悞甚矣賦此為贈

75 携遊逆訂吐幽衷 空得愆期寄簡僮 明日將探琴峽去 想吾頻誦少車公

琴峽遊次寄懷迦菊翁

76 琴峽之奇良可賞 鰲淵龍瀑区摩肩 恨不携君踞絕壁 題詩与共問青天

寄懷子善彦承法雨二友

77 城頭屹立紫屨顏 幽悶難排試一攀 春靄朦朧遥碧合 思君不見又來還

十春詞

吾吟社諸子以十春詞定為本月会期宿題也其詩皆亦既成予也未及閱

顧諸子之作佳妙無比予也微響常々賦去則恐雷同釘釘或避三舍欲勉  
出奇則又恐敵賦無繼因思春孟西遊々歷半旬山水觀賞詩酒叙晤得值  
近來未曾有之況之適也無已乎將追憶春遊之趣之意驅入諸十春詞中  
庶亦足以纔與衆作顏頤以解諸子頤以買其余勇也因運思措辭者如左  
第予是作結構嫌乎新意誠是吾之所獨則未知世人藏否之於吾奈何且  
追憶之作本係紀實吾作之所以觸情觸境々以成事々以成序異撰於諸  
子要之一家十春詞是已讀者能勿以好異驚奇而棄之而有取乎一種趣  
興則吾之幸矣乙酉四月十又三日鷓寮医史書于松江赤崎之官寓

78

記得昨遊春尚淺

雪花狂舞大湖頭

夜程三十余來里

剪々寒威透弊裘

春寒 自松江向平堤

79

沙堤一路砥如平

紅旭微烘展軟晴

遙林淡靄盤鳶小

淺渚暄流浴鴨輕

春晴 發平宅坨步竹石堤

80

修廊曲榭夕陽移

夜氣停勻暖氣宣

後院歌呼人未寢

爐香燭影共春熙

春夜 達月宮村投山生宅至下春山春水並留寓間事矣

81

簾外春風不復寒

名園月出影团々

繁霜只恨擢他殺

枉作佳人病起看

春月

82

倚遍勾欄月未落

梅花簷底仮睡著

相警晨興何事情

要看月落梅花白

春曉 山根子濯聞曉鶯詩起求夢裡声月落梅花白

83

簷鈴不響午風籠

一色長空卵色同

春陰能興酒情協

情在瞢騰昏醉中

春陰

84

酣醉初醒未暮天

雨声含暖四檐懸

撤來狼藉盃盤具

又肆探題闔字筵

春雨闋

85 懸岩絕壁春姿秀 烟曠霞幃春物富 縱使郭熙探彩毫 斯山得否巧貌就

春山 舟上琴峽

86 一川春漲欲囊陵 蕩漾婦舟不少停 源頭知道雪全尽 背指連巒呈巖青

春水 舟下琴峽

87 春水春山昨夢過 春遊奈跡渺茫何 春風吹老又薰吹 竟是一場春夢婆

春夢

七月十七日泛江

88 的是江鄉節序遊 遊艘逐月上潮頭 潮頭奏伎絲管沸 月底飛花紅雨流

光壽孺人六十壽言

89 伯取親隨拔擢榮 叔揚槍技絕倫名 有子如斯欽母德 宜躋壽域体康寧

梅雨中孝孫至分韻

90 庭園幾日暗梅霖 不意良朋著履尋 幽居市近無供給 盤簇枇杷一樹金

三日草堂集分得家字

91 促席茶談雜酒話 當軒柳絮又桃花 蘭亭勝会非難逐 居再山陰便我家

贈田叔度

92 自与相知歲幾過 城居咫尺邈山河 聞近無声詩益進 一揮伝我果能磨

小倉九谷旧居次弁中韻

93 泣尋遺草日過晡 憶昨聯吟撼斷鬚 身如失侶哀鳴鳥 猶恋前窠飛集狐

賦得新涼入郊墟

94 積雨收來尚暑蒸 都人聞競架凉棚 林莊此夕擲扇去 靜坐耽看松月升

出雲五処咏用僧日謙韵

- 95 水明山遠難弟兄 蓴菜鱸魚並擅名 一事吳松有輸我 跨江排布大藩城 松江  
96 羣飛輪奐聳高穹 奉国嘗禱大汝功 安知万仞宮墻美 不在韜光晦跡中 杵築社  
97 蜃氣蒸山澹落暉 輿凶窮処縮乾維 貴勝或興寅餞閣 地方元自配崦嵫 美佐伎

水藩西山君曾於其部内常陸那珂港口起樓匾曰寅賓閣盖取諸堯典語

夫那珂面大東洋君之所以名其樓也意亦可知出雲縮中国乾極日没処

美佐伎処其又西北維餞日之境在焉第三句故兼君是事想及之措辞者

如是云

- 98 千巖競秀俱秀出 万壑争流々駛逸 会稽山水非匹儔 紀勝何人可容筆 立久惠峽  
99 絶巔伝道旧通船 想見玄黄始判年 物換星移觀亦改 穠藍皦紫媚青天 船通路山  
学館秋日  
100 桂香風通講帷開 階下涼沙午露堆 了盆喜見当斯際 学子東西陸統来

鷓寮先生百絶句終